

2022（令和4）年度
推薦入試
公募制入試
卒業生子女・弟妹入試
〔外国語学部〕
小論文問題

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は六〇分である。
- 2 黒色鉛筆を使用すること。
- 3 解答用紙の所定欄に、氏名・受験番号を記入すること。
- 4 縦書きにすること。
- 5 下書きには、この用紙の余白を使用すること。
- 6 書き損じても、解答用紙は再交付しない。
- 7 この用紙は、試験終了後に回収しない。

解答要領

解答は問題文中の設問の指示に従って、解答欄に適切に書くこと。

なお、句読点・かっこなども字数に加える。また、段落の初めの空きや、段落の終わりの行にできた空きも、書いてあるものとみなし、字数に加える。

次の文章を読み、設問に答えなさい。

大学で文化人類学を学ぼうとする学生は異文化理解や異文化コミュニケーションに関心が多い。

たとえば、海外からの留学生が日本に来てどんな苦労をしているのか、国際結婚のカップルがいかに文化の違いを乗り越えているのか、といった研究テーマをもってくる。

いつも、こう問いかける。「異文化って何ですか?」。聞かれた学生はきよんとする。何の疑いもなく「外国の文化です」と答える。

そこには**暗黙の前提**がある。文化は国ごとに違う。その違いは他のどんな差異よりも大きくて、日本人と外国人はつねに理解し合うのに苦労する、と。相互理解を目指しているのに、日本人と外国人には最初から根本的な違いがあるという前提からは始めている。それはほんとうに疑いのないことだろうか。

たとえ日本人どうしても、仲のよい家族でも、すべてわかり合えるわけではない。コミュニケーションには、誰が相手でも困難さがつきまとう。その「ずれ」を、ぼくらは世代の違いや性差、血液型などで説明しようとする。「文化」の違いも、その後づけの理由のひとつに過ぎない。

人はつねに乗り越えたい差異に直面する。国の違いだけが大きな障壁とは限らない。学生のみなさん、国際結婚でなくても、夫婦はいつも異文化コミュニケーションの現場なのだよ。

(松村圭一郎 2018年7月3日 朝日新聞 朝刊「松村圭一郎のフィールド手帳…異文化って何ですか?」)

朝日新聞社に無断で転載することを禁ずる (承諾番号2210921)

設問 異文化を研究するにあたって「**暗黙の前提**」にとらわれることがなぜ問題なのか。筆者の主張を簡潔に説明し、その問

題提起についてあなたの考えを述べなさい。(601字以上800字以内)